

## 第2回偕行社慰霊祭斎行

慰霊・援護委員長（新任）

平野 治征 陸自77

はじめに

春陽麗和の好天に恵まれ、令和5年4月17日午前10時30分より、昨年  
に引き続き、第2回目の偕行社慰霊  
祭が靖國神社にて斎行されました。

慰霊祭に先立ち、市ヶ谷駐屯地メ  
モリアル地区において、偕行社・森理  
事長、ご遺族・阿南健太様他、市ヶ  
谷台慰霊会及び陸軍士官学校並びに  
陸軍幼年学校の代表者が、陸軍大将・  
阿南惟幾これちかだ茶毘の碑、陸軍元帥・杉山  
元及び陸軍大将・吉本貞一ていいち自決跡の  
碑、全陸軍航空部隊の碑、陸軍少佐・  
晴氣誠慰霊碑はるけに対して、万感の思いを  
込め献花・拝礼を実施いたしました。

### 第2回偕行社慰霊祭の概要

慰霊祭斎行の目的は、「国家防衛  
のために尊い一命を捧げた陸・海軍  
将兵、更には戦争において国のため  
に亡くなられた学徒、女子挺身隊員  
などの英霊を慰霊・顕彰し安らけく  
神鎮かみしずまらんことを祈念するとともに、  
感謝の念を捧げる」でありました。

來賓として、陸幕代表者、近隣部

隊長、関係協力団体代表者、地方偕行会長などをお迎えし、ご遺族、陸士・陸幼各期代表者、法人・個人賛助会員、普通会員・家族会員等が参加し、総参加者は約200名でした。

拝殿前の本殿止前には、英霊の御靈を慰め敬意を表するため、陸士各期、陸幼、大東亜戦争全戦没者慰霊団体協議会等の慰霊団体、水交会、陸修会、地方偕行会から供された18基の生花が陽光を受けながら整然と並びました。

慰霊祭は、参集殿から拝殿に参進、開式の辞、元海自東京音楽隊・堀田和夫様のトランペットによる国歌吹奏の後、修祓、献饌、祝詞奏上、偕行社・森理事長による祭文奏上、続いて同トランペットによる献奏で拝殿における儀式は終了しました。最後のトランペットによる献奏は、「ふるさと」「同期の桜」「海行かば」の三曲。静寂の中に、時には皓皓と、またある時には杳杳と響き渡り慰霊祭が一層印象深いものとなりました。

この後、本殿に昇り、代表者による玉串奉奠に合わせて参列者全員が拝礼、英霊の御靈に哀悼の誠を捧げました。

## 第2回偕行社慰霊祭・祭文

偕行社理事長・森勉が奏上した祭文に偕行社慰霊祭の趣旨、慰霊祭継続の強固な意思、偕行社を陸自元幹部自衛官が受け継ぐ覚悟などが表明されていますので、長くなりますが全文を掲載いたします。

\* \* \*

【本日 四月十七日は、今から遡ること百二十八年前の明治二十八年、下関条約が締結され、明治維新以降近代国家として発展するわが国が、国軍建軍後初めての国運をかけての対外戦争である日清戦争終結の日であります。爾来、明治・大正・昭和のわが国防衛のために尊い一命を捧げられた多くの陸軍将兵とともに海軍将兵の戦没者の御霊が祀られるこ靖國神社において、「第二回偕行社慰霊祭」を執り行うにあたり、ご参列の皆様を代表して、謹んで祭文を奏上いたします。

江戸幕府から明治政府へと、日本が明治維新によって近代化への道を歩き出した端緒となったのは嘉永六年のペリー来航という軍事力を背景とした開国・開港の要求でした。その後の下関戦争での敗北、薩英戦争の経験から、近代的な国づくりと欧

米列強の軍事力に対抗し得る近代的

な国軍の必要性を痛感した時の明治政府は、明治二年兵部省を設置し、軍事制度と組織の整備に着手しました。明治五年には兵部省に代わり陸海軍省が設けられ、明治六年徴兵令に基づく徴兵が開始され、わが国の国軍としての基礎が整えられました。

この日本国軍の建軍からまもない明治七年には陸軍士官学校、明治八年には陸軍幼年学校がそれぞれ創設され、その翌年の明治九年には海軍兵学校が改称されて海軍兵学校が開校しました。

陸軍士官学校からは、約三万九千名の卒業生が陸軍の将校として巣立っていきました。陸軍将校の方々は、明治十年の東京九段を皮切りに全国各地に設立された『偕行社』において、親和・研鑽に努められ、明治・大正・昭和にわたるわが国の近代国家建設の過程において、日本陸軍の中核として国家存亡にかかわるわが国の枢要な軍事の任にあたられ、わが国の柱石としての役割を果たされました。

特に、明治以降の日清戦争から大東亜戦争までの数次に亘る戦争に際しては、多くの陸軍将校の方々は、

「国を護る志」のもと、伝統ある祖

国の将来にわたる国体の護持と繁栄、そして安寧を希い、北は酷暑不毛の地、南は酷暑瘴癘の地に赴き、陸にまた空において、勇戦敢闘して祖国のために殉じていかれました。その数は約八千余柱に及びます。愛する家族を故国に残して異国の地で

敢然と散って逝かれた陸軍将校の方々の無念さと一家の柱を失い後に残されたご遺族の方々の深い悲しみに思いを致すとき、今なお万感胸に迫るものがあります。

同じく、海軍兵学校を卒業された約一万一千名の海軍士官の方々は、太平洋などの海・空戦において奮戦敢闘して、約四千名の方々がわが国防衛のためにひたすら「国安かれ」の一念のもと、祖国のために殉じられました。また、学徒や女子挺身隊などの多くの方々が勤労働員中に軍需工場で亡くられました。このよう

な多くのかけがえない方々を失ったことは、ご遺族はもとより、国家にとつて誠に大きな痛手であり、悲痛の念に堪えません。

今日、わが国・国民が享受している民主主義国家としての平和と繁栄は、明治以降の国家存亡の危機に際

して、「国を護る志」を持ってわが国の存立を担う崇高な職務に殉ぜられた多くの方々の国のために尽くすという無私の献身により築かれた礎の上にあると言つても過言ではありませぬ。改めて、ここ靖國神社に祀られる陸軍を始めとする全ての戦没者の御霊に対しまして謹んで哀悼の意を表しますとともに、限らない尊崇と感謝の誠を捧げます。

現在、遠く欧州においては、軍事力を行使して隣国の体制の変換を求める軍事侵攻事態が生起しておりますが、国際社会は核保有国による非核保有国への侵攻を抑止出来ないことが明らかになりました。翻つて、わが国周辺には政治体制の異なる核保有国が存在しています。わが国を取り巻く安全保障環境は、いまだかつてない極めて厳しい状況にあると認識せざるを得ませぬ。このよう

ななか、同じ「国を護る」という強い意思をもつ陸上自衛隊は、防衛予算などによる人的・物的制約に加え、憲法上の制約により軍隊としての地位を与えられておらず、そこから派生する多くの重要な課題を抱えてわが国防衛の任務を遂行せざるを得ませぬ。偕行社は、令和六年四月にお

ける陸上自衛隊の幹部退官者の会である陸修会との合同を経て、戦前の陸軍将校の皆様のご意志を受け継ぐ陸上自衛隊の元幹部自衛官の組織として、先人から託された歴史と伝統・文化に恵まれたこの素晴らしい祖国日本の護持に寄与するため、諸課題の解決による安全保障の充実・発展に尽力するとともに、陸上自衛隊に対する必要な協力を実践していくことを御英霊の皆様にお誓い申し上げます。

一方において、先の大戦が終結してから長い歳月が流れ、今や戦後生まれの世代が国民の主力を占めるようになり、平和と繁栄に慣れるうちに、戦没者に対する敬意と慰霊の心が薄れつつあることが憂慮されます。更に、国のために尽くす責任感の希薄化と国民道義の頹廢は大きな懸念であります。偕行社は、本日のこの慰霊祭とおして、国のために殉じられた陸軍の戦没者の慰霊・顕彰と国民一人一人の「国を護る志」の大切さをしっかりと普及し、後世に受け継いでいかなければならないと決意を新たにするものであります。

皇陛下御即位以降三十年にわたり、戦没者の慰霊には格別の大御心を寄せられ、国内外にわたり慰霊の旅を続けられました。また、天皇陛下は上皇陛下の御心を引き継がれ、昨年十月、即位後初めて先の大戦において激戦地となった沖縄本島に行幸され、戦没者を慰霊されました。陸軍の戦前の偕行社の良き伝統と輝かしい業績を継承する陸上自衛隊など元幹部自衛官からなる新たな偕行社は、上皇陛下・天皇陛下の戦没者の慰霊に対する強い思い召しに沿うよう、尊い一命をわが国のために捧げられた戦没者の慰霊・顕彰が、世界の民主主義国家の一国として在るべき姿で行われるまでの間、国家に代わり、靖國神社において「偕行社慰霊祭」を斎行して、陸軍の戦没者の慰霊・顕彰を行つて参ります。また、陸軍の戦没者のもとより、今後同じ「国を護る志」を持ち、事に臨んで任務遂行中に亡くなった場合の陸上自衛官などの殉職者の慰霊・顕彰が、民主主義国家として相応しい姿で整齐と齋行されるよう提言していく所存であります。

最後に、わが国の防衛のために尊い一命を捧げられた陸軍将兵、海軍将兵、更には戦争において国のために亡くなられ学徒、女子挺身隊員などの戦没者を慰霊・顕彰し安らげく神鎮まりますことを祈念するとともに、感謝の念を捧げ、この記念すべき日の慰霊の言葉といたします。

令和五年四月十七日  
公益財団法人 偕行社

終わりに  
昨年第一回偕行社慰霊祭は、偕行社が従前に行っていた靖國神社等月例参拝に代わる初めての試みでありました。その教訓を生かし、本第二回偕行社慰霊祭は、厳肅且つ荘厳に滞りなく齋行されました。齋行に際し、ご支援を頂いた靖國神社及び偕行社のスタッフの皆様、そしてご多用中にも拘らず参列を頂いた皆様にごこの場を借りて深甚なる感謝の意を表します。

偕行社は、所要の最終合意・議決を経て、令和六年4月に、陸上自衛隊幹部退官者の会・陸修会と合同し、「陸修偕行社」として新たな第一歩を踏み出す予定です。今後毎年4月17日に「陸修偕行社慰霊祭」として慰霊祭を齋行いたしますが、多くの皆様のご参列を心からお待ちしております。